



共同獣医学部学術セミナー

演題: 犬の硬膜外鎮痛に関する最近の知見

講師: 井芹俊恵(東京農工大学 動物医療センター)

開催日時: 11月26日(火)15:30-16:30

場所: 山口大学連合獣医学研究棟4階大講義室

講演要旨: 硬膜外鎮痛は硬膜外腔に少量の鎮痛薬を投与することで強力な鎮痛効果を得られ、とくに硬膜外カテーテルを利用した場合には鎮痛時間を調節することができる。人では多用されているものの獣医領域ではそうとはいえ、その原因として、犬の持続硬膜外鎮痛について情報が少ないことから敬遠されている可能性がある。硬膜外腔への薬剤投与時に、硬膜外腔に針先が到達したことを確認する方法の一つとして「抵抗消失法」がある。これまで、抵抗消失法には生理食塩水(生食)のほかに空気も用いられてきたが、硬膜外腔に入った空気は泡となって薬剤の分布を障害し、鎮痛範囲が予想よりも狭くなったり、「まだら状」の鎮痛効果の原因となったりするので、生食など液体を用いるべきである。また、局所麻酔薬を用いた場合の副作用として、鎮痛領域の血管拡張、あるいは心臓交感神経ブロックにより低血圧を生じることがあるが、ほとんどの場合、適切な輸液あるいはドブタミンなど陽性変力効果を持つ薬剤の投与などで改善することができる。また、硬膜外腔へのモルヒネの単回投与に比べると手術侵襲に対する侵害刺激遮断効果が優れている。さらに、局所麻酔薬を用いた硬膜外鎮痛は、脊髄を抑制することで結果として全身麻酔効果があること、また麻酔による肝血流量の低下を抑制すること、意識が清明であることなど、鎮痛薬の全身投与とは異なる「鎮痛効果以外」の利点が最近注目されている。

問合せ先: 中市統三(内線5898)